

● 銭貨が使われなかった時代 — 古代から中世へ —

銭貨の流通が途絶え、11世紀初めからの約150年間、日本は金属貨幣の空白期となりました。

平安後期の貨幣 — 絹・布と米の時代 —

銭貨に代わり貨幣として用いられたのは、絹・布（麻布）と米でした。中でも10世紀に生産が拡大した絹は銭貨に代わる貨幣として機能しました。



これらは、モノの値段をあらゆる安定的な価値基準としての役割を果たし、銭貨が発行されている間も貨幣（交換のなかだち）として使われ続けていました。

物々交換とは異なり、特定のモノが貨幣の役割を果たした時代でした。

信用経済の芽生え

絹・布・米は持ち運びに不便だったため、その省力化の手段として信用経済も芽生えてきます。役所間では所管の倉などに支払を命じた書類を出し、その書類が今日の小切手に近い機能を果たしました。

貨幣の使用は、このような絹・布・米の時代を経たのち、12世紀半ばに中国から輸入した渡来銭の時代を迎えることとなります。

<コラム>

【お金の使い方② 大金でなにを手に入れる？】

《富と権力をもとめて—蓄銭・献銭をするひとびと—》

律令国家は、地方豪族や貴族・役人などが蓄えた銭貨を手に入れるため、一定の銭貨を国家に納めることで、位階を与えることを定めました（蓄銭叙位法）。こうして、銭貨を集めることで、位階を持たない人々が有位者となる可能性も出ました。

蓄銭叙位法の内容

位階	蓄銭額	処置
5位以上正6位	10貫以上	臨時の勅に従うこと
6~8位	10貫以上	位1階を進める
	20貫以上	位2階を進める
大初位上	10貫以上	従8位下を与える
初位	5貫	位1階を進める
無位	7貫	少初位下を与える
白丁	10貫	少初位下を与える

<参考資料> 銭縷

1貫文（約1000枚）江戸時代

1つの銭縷（銅銭100枚分）を10個分連ねたものが1貫（銅銭1000枚分）です。古代には位階を持たない人が最も下の位を得るためには、この銭縷の10倍となる10貫もの銭貨が必要でした。



献銭叙位

747（天平19）年、河内国の大初位下の河内連人麻呂は東大寺盧舎那仏（東大寺大仏）への寄進として銭1000貫を献上し、従五位下を与えられました。その後も、銭を献上する事例は多く見られ（右表参照）、地方に大量の銭貨を持つものがいたことがわかります。

氏名	本拠地・官職	初位	8位	7位	6位	5位
小田根成	?	→	● 1000貫 車1両 鍬200柄	→	→	→
日根乙虫	讃岐国人	→	● 1000貫	→	→	→
越智飛鳥麻呂	伊予国越智郡大領	→	→	● 1000貫 ? 230疋	→	→
新治子公	常陸国新治郡大領	→	→	→	● 1000貫 布1000段	→
額田部塞守	長門国豊浦郡大領	→	→	→	● 1000貫 稲1000束	→
周防凡葦原	周防国人	→	→	→	● 1000貫 塩3000顆	→

米原永遠男『天平の時代』（集英社・1991年）より

古代の銅銭ができるまで

古代の銭貨は、銅を主な原料として作られました。原料の銅はどのように生産され、銅銭がつくられていったのかをご紹介します。

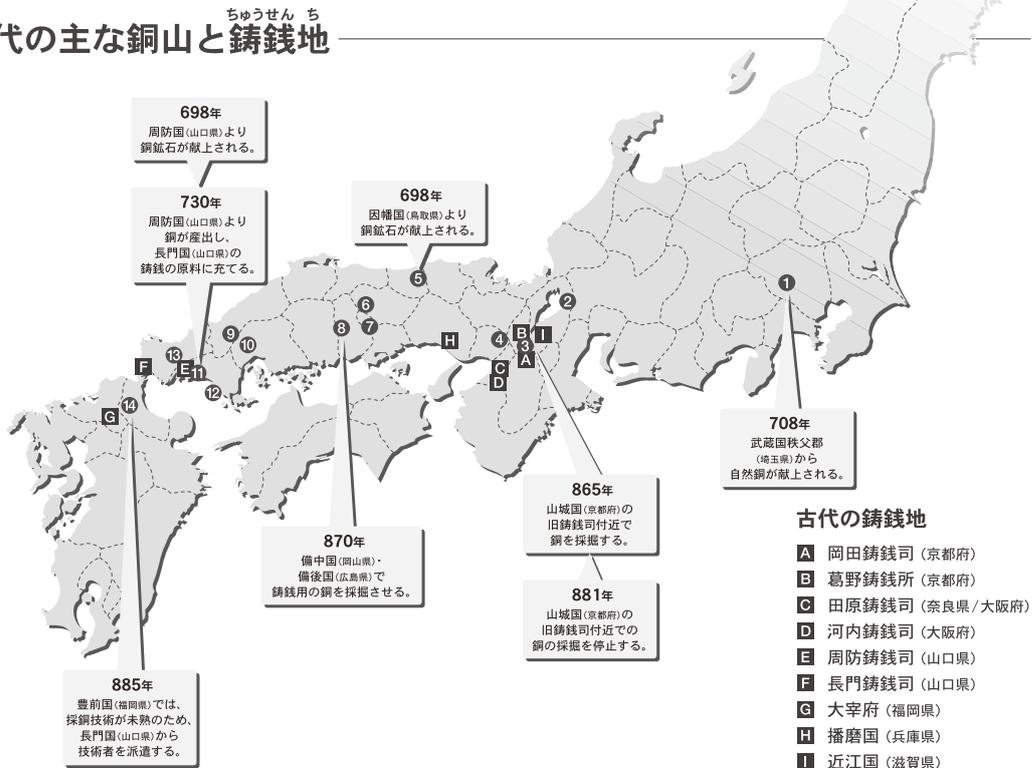
●銅の生産 一銭貨の原料をつくる一

708(和銅元)年、武蔵国秩父郡(埼玉県)から自然銅が朝廷に献上され、年号も「和銅」と改められました。古代の史料には「銅」にまつわる記載があり、各地に銅山や銭貨をつくる役所「鑄銭司」があったことがわかります。

史料にみられる古代の主な銅山と鑄銭地

古代の銅山

- ① 武蔵国[秩父郡]
- ② 近江国
- ③ 山城国相楽郡岡田旧鑄銭司山
- ④ 摂津国能勢[多田銀銅山]
- ⑤ 因幡国[岩美町荒金銅山?]
- ⑥ 美作国真嶋郡加夫良和利山
美作国大庭郡比智奈井
- ⑦ 備前国津高郡佐佐女山
- ⑧ 備中国・備後国[英賀郡?]
- ⑨ 石見国美濃郡都茂郷丸山
- ⑩ 安芸国
- ⑪ 周防国吉敷郡達理山[防府市]
- ⑫ 周防国熊毛郡牛嶋[光市]
- ⑬ 長門国[長登銅山]
- ⑭ 豊前国田河郡香春岳
豊前国規矩郡



銅ができるまで 絵図は江戸時代の作業風景を示していますが、基本的な銅の生産工程は古代から現代まで変わりません。



資料：『鼓銅図録』(19世紀)より

古代の銅生産遺跡「長登銅山」

長登銅山（長門国・山口県美祿郡美東町）は、8世紀初頭から和同開珎をはじめとする古代銭貨や奈良の大仏の原料となる銅の生産で重要な役割を果たしました。

「長登」の地名は、古来奈良に銅を献上したため「奈良登」と呼ばれたことに由来すると伝えられています。



長登銅山の歴史

長登銅山跡は、銅の原料となる鉱石をとる「採鉱」から金属成分をとりだす「製錬」に至るまでの銅の生産工程を知ることのできる貴重な遺跡です。古代以来、自然銅や孔雀石などの銅鉱石が産出されました。

- 698年 安芸・長門2国が銅鉱石から採れる顔料（緑青など）を朝廷に献上する
- 8世紀初頭 銅の採取・製錬のために国の役所が置かれる
産出した銅が和同開珎の原料となる
- 8世紀中頃 奈良の大仏の原料銅が盛んに産出される
- 9世紀頃 銅の生産が減少し、鉛の生産が多くなる
- 859年 長門国採銅使が任命される
- 869年 長門国採銅使が解任され、長門国司が任務を代行する
- 885年 長門国から豊前国に採銅技術者を送り、技術を教える

—以後、中世・近世・近代を通して採掘され、1960年に閉山



瀧ノ下・大切4号坑
入口は近代以降に拡張されましたが、奥には奈良時代の坑道が残っています。



岩に付着した緑青
瀧ノ下山の石灰岩には、付着した孔雀石（緑青）が見られます。

大仏さまと「長登銅山」



奈良の大仏には500t近い銅が使用されました。東大寺境内から出土した銅塊の分析結果によって、大仏の原料が長登銅山産の銅であったことがわかっています。

東大寺盧舎那仏

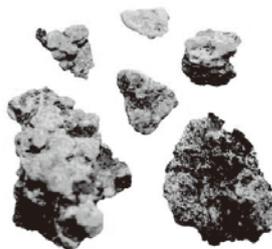
出土した鉱石と木簡

遺跡からは、銅生産の工房跡とともに奈良時代の木簡のほか土器や木製品、鉱石や金属のくずなどが出土しました。

なかでも、木簡には銅生産の組織、労働の状況や聖武天皇の皇后（光明子）とのかかわりを示すものが含まれ、注目されています。



木簡（奈良時代前半）



銅鉱石の珪孔雀石（8～9世紀）



木簡の出土状況

銅銭の製造

古代の銭貨は、「鑄銭司」という銭貨をつくる専門の役所で作られました。近年、飛鳥池遺跡での富本銭の鑄銭工房、平城京内での小規模鑄銭工房の発見などにより、鑄銭司以外でも銭貨の鑄造が行われたことが、知られるようになってきました。

銭貨をつくった役所 鑄銭司

鑄銭司とは、鑄銭のために置かれた令外の官*です。長門・山城・周防国などにあったことが知られています。

*令に規定されていない役所

鑄銭司関係の主な記事

694年	大宅朝臣麻呂など3名を鑄銭司に任命
699年	はじめて鑄銭司を置く
708年	はじめて催鑄銭司を置く
709年	河内鑄銭司を寮に準ずる扱いとする
730年	周防国の銅を長門の鑄銭にあてる
735年	更に鑄銭司を置く(岡田鑄銭司か?)
767, 769年	田原鑄銭司の長官の任命
782年	鑄銭司の廃止
790年	また鑄銭司を置く
818年	長門国司を鑄銭使に改編
825年	長門国の鑄銭使を停止し、新たに周防国に鑄銭司を設置
827年	鑄銭司が岡田にあった時にない、周防鑄銭司に医師1名を置く
865, 867年	「山城国相楽郡岡田郷旧鑄銭司」で採銅を行う
870年	山城国葛野鑄銭所で鑄銭を行う
940年	天慶の乱により、周防鑄銭司が焼失

長門鑄銭司

設置時期：730年頃

山口県下関市覚苑寺内からは、和同開珎と和同開珎鑄造遺物(鑄型、鞆羽口、坩堝)が発見され、長門鑄銭司跡と推定されています。



長門鑄銭司跡



和同開珎鑄型(上)、鞆羽口(下)

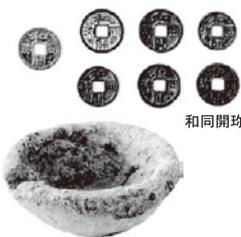
岡田鑄銭司

設置時期：735年?～(827年までには停止)

京都府木津川市加茂町錢司遺跡からは、和同開珎と和同開珎鑄造遺物(銅滓、鞆羽口、坩堝)が発見され、岡田鑄銭司跡と推定されています。



岡田鑄銭司跡



坩堝

周防鑄銭司

設置時期：825年～?

山口県山口市鑄銭司字大島・四辻遺跡からは、長年大宝、鞆羽口、坩堝などが発見され、周防鑄銭司跡と推定されています。



周防鑄銭司跡



坩堝(上)と鞆羽口(下)

銅銭ができるまで

